

第42回 ウンカ

カゴちゃん ショウくん かほくがたナルドレン



ウンカは、農業害虫としては有名な小さなカメムシの仲間を指すグループ名です。田んぼや草原には必ずといってよいくらい普通にいる生きものです。身近な存在ではありますが、あまりなじみのない生きものです。

どんな形をしているかという、セミの頭を小さくして翅を左右から少し圧迫して立てたような形をしています。小さいウンカで成虫が2mmくらい、大きいウンカでも5mm程度です。こんな小さな虫ですが、大量発生してイネに寄生して深刻な被害を与えることがあります。

日本で越冬できる種もいますが、東南アジアで発生して風に乗って日本に飛来するものもいます。イネに被害を与えるウンカのうち、セジロウンカとトビイロウンカは、イネ以外の植物上ではほとんど生活できないため、一年中栽培イネや野生イネがある熱帯地方に分布していて、夏になると日本にやってくるということです (http://www.syngenta.co.jp/cp/columns/view/unka_knowledge_02/)。

イネに深刻な被害をもたらすのは秋ウンカと言われるトビイロウンカで、セジロウンカやヒメトビウンカは夏ウンカといわれ、それほど被害をもたらさないようです。また、セジロウンカはイネを病気に対して強くする効果があるとする報告もあり (五味、2010)、単純に害虫ともいえないようです。

ウンカは江戸時代以降、大発生を繰り返して時に稲作に深刻な被害をもたらしてきました。享保の大飢饉や天保の大飢饉の原因ともされています。しかし、近年では農薬の開発により深刻な被害は減っています。一方で、農薬に対して抵抗性を持つウンカの出現も報告されており、最近の

ネオニコチノイド系殺虫剤であるイミダクロプリドに対しても、トビイロウンカが抵抗性を持ち始めているという報告もされています (Matsumura他、2014)。

江戸時代には、鯨の油を竹筒に入れて田に流し、細竹のムチではたき落としウンカを退治したそうです (『除蝗録』、日本農書全集第15巻)。こうした物理的な駆除方法であれば、抵抗性は生じませんが、現代に同じ方法をとるのは難しいかも知れません。

河北潟の周辺の田んぼでよく見られるのは、セジロウンカ、ヒメトビウンカです。その他にヒシウンカもわずかにみられます。イネの病害虫としてやっかいなトビイロウンカはみられません。河北潟周辺に限ってみると、ウンカに対してはいまのところ殺虫剤の必要性はあまりなく、薬剤を使いすぎることによってスーパーウンカを作ってしまうことにも注意すべきです。(文：高橋 久)